

『資本論』体系の図式的解明（下の一）

梯 明 秀

はし がき

- 一、方法と体系との関連
- 二、『批判』『序説』の方法論（以上前々号）
- 三、下向と上向との思惟様式の差異
- 四、上向のための要素的地盤と目的論的立場
- 五、上向過程における必然性と合目的性
- 六、ヘーゲルの思惟の円環的運動（以上前号）
- 七、ヘーゲルの円環の『資本論』への適用
- 八、経験科学からの外へと内へと二つの超出
- 九、上向下向の矛盾の統一としての円環的体系（以上本号）
- 十、上向の思惟の論理学的構造（以下後号）
- 十一、上向的叙述の現象学的方法
- 十二、現実の出発点と現実的端緒
- 十三、歴史的現実と『資本論』の主体的立場
- 十四、帝国主義的段階への上向的演繹の必然性
- 十五、マルクス主義諸理論の統一的体系
- 十六、残された諸問題

七、ヘーゲルの円環運動の『資本論』への適用

さて、われわれは本節において、ヘーゲルの哲学体系としての概念的思惟の円環運動の図式が、そのまま『資本論』に如何に適用しうるかの問題に入ろうとするのであるが、このばあい、われわれの頭脳は、一層の自信をもつて、ますます思弁的に働かされねばならないであろう。本稿は第五節において多少の思弁的な分析をほどこ

してきた。というのも、ヘーゲルの言うとおり「目的論なるものは、思弁的にのみ理解されうべきものである」（E. § 204. A.）からであった。彼によれば、「思弁的なものとは、思惟された理性的なもの——といつても肯定的に理性的なもの——にほかならない」（*ibid.*）のであるから、彼の概念が理性的であるための契機としての合目的性を思惟するばあいにも、われわれの思惟能力は思弁的にならざるをえなかつたわけである。そのかぎりではヘーゲル哲学は全体として思弁的であり、したがって、その体系の図式的な解明である前節におけるわれわれの論述も、また思弁的なものになるほかなかつた。ところで本節では、この思弁的のみに思惟さるべきヘーゲルの理念の円環運動を、『資本論』の上向的な概念的思惟の運動のうちに適用してみることによつて、後者のうちに前者と類似な円環的な体系を見いだしうるか否かを検討しようとするのであるからして、本節の論述が十分に理解されうるためには、いよいよ読者の思弁力に期待をかけざるをえない、というわけである。

(1) ヘーゲル哲学が全体として思弁的であり、したがって、この哲学における体系的思惟の円環運動を『資本論』に外から適用してみようとする本稿の論述も、自ら思弁的にならざるをえないとしても、この外的適用によって始めて見いだされるはずの『資本論』自体の学的体系性が、やはり全体として思弁的であると想定していることには、けつしてならないであろう。だからといって逆に、マルクスの概念的思惟において思弁的要素が全く棄てさられていると見るものは、『資本論』をもって古典経済学と同じく単に悟性的な立場の理論体系としている普通の経済学者の誤謬におちいるほかないはずである。本稿の以下の論述は、ヘーゲルの思弁が如何に『資本論』体系のうちに止揚されているかを、検討してゆく過程とも見ることのできるのであるが、さらに、このマルクスの体系的思惟においてヘーゲルの思弁が如何に唯物論化されて止揚されているかということ、とくに、その上向的な概念的思惟における弁証法において、事實上、それが不可欠な要素になっていること、などについては、次号の後節にゆずることにした。この上向的思惟の論理構造は、いうまでもなく、上向的叙述

の方法をも内から規定するものであり、これらの規定関係を吟味しておくことは、「資本論」を論理学として読むかぎり、ぜひ明瞭にしておかねばならないことと思われて、これに閑説することに決心したために、本稿は、いよいよ著しく老大なものに成ってしまつて、本号では完結することが不可能になつた次第である。

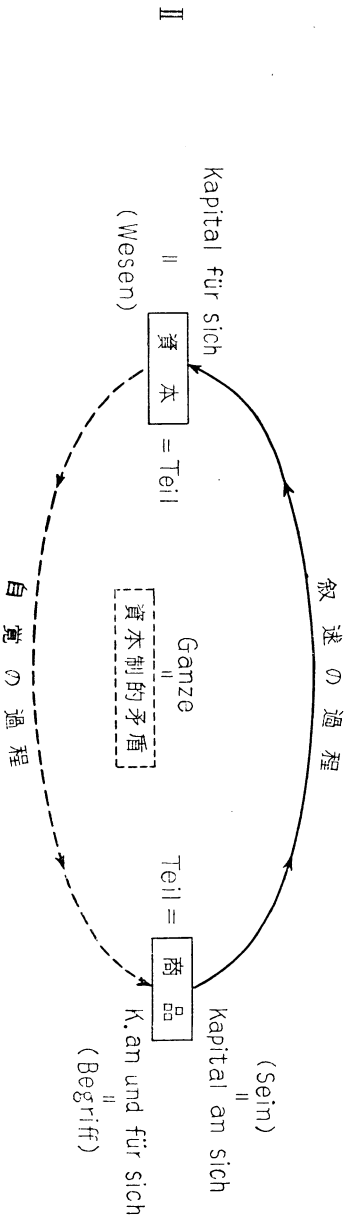
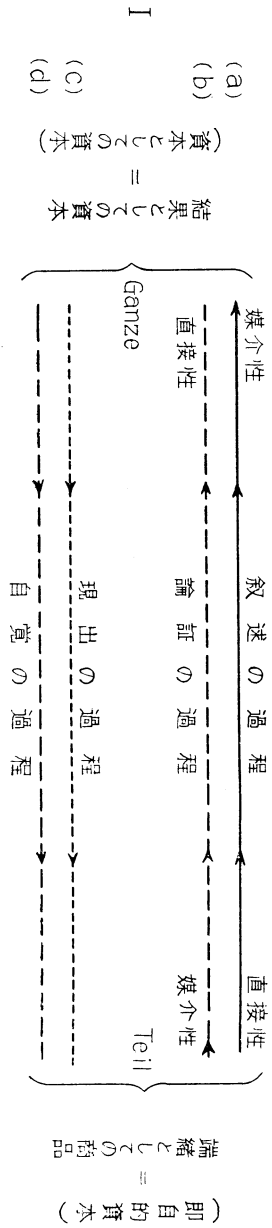
とりあえず、前節におけるヘーゲルの円環的体系についての図式(シエーマG)を、そのまま『資本論』に適用して見ることにしよう。そうすると、シエーマHのごとくになる。そこで、さしあたつて、その(I)についてであるが、端緒としての商品は、結果としての資本の即自的なるもの、直接的なるもの、資本としての具体的諸規定の未展開なるもの、すなわち、これらの諸規定を潜在せしめているものであり、そのいみで、まさに資本制の商品の単純なる規定性にあるものである。そして、かかる単純なる規定性にあるかぎりのものとして端緒でありうるのであり、この端緒的な抽象的規定の具体化の過程として、端緒における潜在的資本が資本としての資本に顕現してゆくところの、概念的思惟の上向的な自己展開が行われる。この点については、第四節で述べておいたとおりであるが、このように、商品から資本への叙述の進行がヘーゲル的に理解しうるかぎりでは、この直接的進行は、前節のシエーマHの(I)と同じく、四つの論理の意味をもつことに問題はない。

ただ、ここで、特に諸者の注意を喚び起しておきたいことは、ヘーゲルの概念的思惟の進行が純粹知識を要素的地盤としてのみ可能であり、しかも、この地盤という意味での要素の直接的なるものが、その進行の端緒であつたのと同じく、即自的資本としての商品は、資本としての資本へ上向するための端緒であるとマルクスによつて主張せられるばあひも、この上向的運動を可能ならしめるための論理的地盤の意味で、資本の要素である、と理解せねばならないということである。そしてこのことについては、前号の第四節を費して詳論しておいたこと

ろであるが、さらに本節の以下の論述のために、同節に掲げておいたシエマDの解明するところの思想内容について想い起しておくことが必要である。それは、商品から資本への上向的叙述なるものは、端緒的商品に既に潜在する資本概念が、その全体的内容を目的として観念的に定立することから始まるということ、したがって、この潜在的な未展開の資本概念についてのわれわれの概念的思惟の自己展開的な進展過程なるものも、最初のこの観念的目的が実現されつつある過程であるということ、したがってまた、資本概念がその全具体性において規定的に展開されつくす上向の到達点において、最初の目的が実現されたことになるということ、要するに論理的に必然的な上向の過程が目的論的にも見られねばならないということについてである。そのばあい、端緒的商品における資本の全体的内容と到達点における全体的内容とは、いまだ無規定の状態にあるか、完全に規定された状態にあるかの差異をもつだけであって、ただそれが無規定であるかぎりで、資本という实在形態としては実存しえず、この实在形態の要素的な部分としての商品形態としてしか実存しえなかつたというにすぎなかつたのである。このいみで、必然的にして合目的な上向過程は、その实在性の面では、部分から全体へという進行の形態をとると見ることができたわけである。そこで、いまここに、概念としての資本の全体的内容を、さらに具体的に資本制社会の階級的矛盾そのものであるというように、一步すすめて理解することができるとするならば、本節のシエマHの（I）については、次のごとく述べることができるであろう。これは、拙著『資本論の学問的構造』所収「哲学と社会科学」第五節「資本論における哲学と科学との一致」のIにおける文章である。

——「すなわち『資本論』においては、商品は即自的な資本であるからして、この資本としての全体は、自己否定的に部分としての商品に表現されているのである。したがって要素的商品から弁証法的分析をはじめると

Schema H



『資本論』体系の図式的説明 (七の二) (梯)

いうことは、そこに含まれている全体的な資本制的矛盾を向自的に内へ反省してゆくことであり、そして最初の即自において向自的にならしめたとき、即自にして且つ向自的に、資本主義社会の全体的矛盾をば、端緒的商品において自覚したことになる。」——

さて右の文章は、『資本論』の向上叙述を、単に商品から資本への直線的進展と見ているのでなくて、すでにヘーゲルの一つの円環として把握していることを前提している。ところで上の叙述を円環として理解するということは、シェーマ（Ⅱ）のごとく図式化することである。そのかぎり、この引用文における全体とは、ヘーゲルと同じく、円環を描くもの、あるいは円環運動において完了するものである。したがって図式的には円環そのものが全体である。そしてさらに、ヘーゲルにおいて、円環の思惟運動において自己完了する主体は、理念であったのたいして、マルクスにおいては、それは資本制的に基本的な階級的矛盾をば自覚する主体のことでなければならぬと、いまここに考えられているのである。そのかぎり、この階級的自覚の主体の对象的契機としての実在的な社会的総資本にも、資本制的な階級的矛盾の全体が、对象的に規定されており、したがって、端緒的商品もまた、全体としての資本制的矛盾の要素的形態を内在せしているものというように理解されねばならない。さらに上の叙述の到達点としての社会的総資本において、資本制的矛盾が規定的に展開されつくしているにしても、この全体的矛盾が最初の出発点としての個々の資本制的商品において自覚されるという完了をまつて、上の叙述の円環的な論理の意味を実現するのであるからして、この到達点としての資本は、直線的図式におけるごとく、もはや全体としてのカテゴリーで表示すべきではなく、具体化されたかぎりの一つの部分であるにすぎないことになる。いいかえれば、自己の全体的内容を本質として反省したかぎりの、単に対象的な規定

における資本であるにすぎない。すなわち未だ単に向自的であるにとどまる資本にすぎない。したがって、資本としての資本でもない。概念としての概念といういみでの、資本としての資本は、即自的資本としての端緒的商品において向自的資本が統一されたときのカテゴリーである。この点の理解を準備するために、われわれは第五節においてシェーマFを予め掲げておいたのであるが、このシェーマFを見較らべて右の理解を十分なものとなしうるならば、前掲拙著における次の文章は、そのまま、本節のシェーマの(Ⅱ)の解説として受け容れらるべきものである。

——「端緒的商品から資本への上向的叙述としては、外見的には、部分から全体への前進だけのようであるが、そのかぎりでも、それは、即自的な無自覚の全体から自覚の全体へということにも見えるのであるが、……この自覚の全体は、いまだ過程的なもの、途中にあるもの、すなわち対象的資本において反省されただけの向自的なものであるにとどまる。そして、この対象的な矛盾が、最初の部分としての商品の即自性に主体的に結合されたときの円環運動こそが、真の全体であるべきことを知るならば、到達点としてのこの媒介的な資本も、また一つの部分にすぎないはずであるから、それは、商品における無自覚の全体から資本としての自覚的部分へとして、あるいは全体的自己(＝資本制的矛盾)の自己自身による弁証法的分析として、真実には、全体から部分へということになる。すなわち、全体を媒介にした部分から部分へである。それで、叙述における上向を、単純に部分から全体への演繹と決めてしまえば、叙述の背景には、ただ、その半面の全体から部分への論理だけを見なければならぬ。……しかし真実の背景の論理は、その表面の論理が全体を媒介にした部分から部分へであるにたいして、その裏面の論理として、部分を媒介にした無自覚の全体から自覚の全体へであって、

しかも、このままの姿でわれわれに現われるのは、到達点の最後においてでしかない。——

そこでシエマ（Ⅰ）における破線で示した自覚の過程は、右に述べたとおりの「真実の背景の論理」として、すなわち、円環運動の完了としての全体が、次々と自覚されてゆく過程として理解されねばならないものである。要するに、全体的自己が弁証法的に自己分析してゆくと言うばあいの、この弁証法的な特殊化的自己限定の過程を媒介にした全体的自己の自覚の論理のことであつて、この自覚のために媒介になるところの、特殊化的に限定された部分から部分への弁証法的過程だけを、抽象的に取りだして見たものが、叙述の過程であるということになる。そのかぎりでは、単純な規定性にある部分（＝端緒的商品）から、複雑な規定性にある部分（＝向自的資本）へという叙述の表面の論理もまた、それ自体で、全体的自己の自己自身による弁証法的分析の過程なのであるし、そして、この過程が全体的自己の自覚される過程であるかぎりでは、右の部分から部分への弁証法的分析の進展を媒介にせざるをえないといういみで、二つの論理は、相表裏した同一の論理でなければならぬ。いいかえれば、叙述の過程と自覚の過程とは同一の論理の表と裏として同時的に行われているのである。したがって、叙述が向自的資本に到達しているとき、この向自的資本もまた同時に、即自的資本としての端緒的商品に到達していなければならない、というわけである。この関係を、シエマHの（Ⅰ）の図形によって解説するとすれば、その実線で描かれてある上向の半円としての叙述の過程は、今までにおいて述べたとおり、それ自体が体系的であるかぎりで、破線で描かれてある下向の半円としての自覚の過程と同時的に成立するものであつて、しかも、この自覚の過程が体系の裏の論理を表示するにたいして、その表の論理を表示するものである、と考えねばならない。そして、これらの二つの半円からなる円環そのものは、資本制社会の階級的矛盾の全体を表示すると

されているわけであるが、このばあいには、上向的な叙述の表面の論理とは、資本の即自的な直接性としての端緒的商品という要素的部分から、この全体がその向自的資本としての対象的な本質的規定を全面的に自己展開したかぎりの結果的部分へと、概念的思想が、演繹的に前進する過程のことであることに問題はない。だが、これにたいして、叙述の背景にある下向的な裏面の論理とは、この表面の論理の前進過程の一步一步において、階級的矛盾としての全体が、その概念規定を媒介にして、これを自己の内容として自覚してゆく、という一步一步の反省が継起してゆく過程のことなのである。しかし、この全過程を自覚の論理として統一にみれば、向自的資本から端緒的商品へと逆の順序で、叙述の過程の一步一步を媒介していくものと、考えられることができるであろう。そのいみで、この自覚の過程は、叙述の過程が前進の論理であるにたいして、後退の論理であるということもできるであろう。そして、このようなものとして、それは、全体の自己自身による弁証法的分析の過程そのもののことなのである。

さらに、資本としての資本といふべきこの全体の具体的な顕現は、最初の即自的資本としての端緒的商品に向自的資本が自覚されて即自且向自的なものになったときに完了するのであるからして、上向の到着点としての向自的資本は、ただ対象的にのみ規定された全体にとどまるものとして、この完了的な全体ではなくて、依然として具体化されたかぎりの部分にとどまるとされたのであるが、しかし円環運動が完了されたかぎりにおいては、この円環を形成する如何なる時点も、この形成のための要素として、すべてが完了的な意味をもつという関係になければならない。とすれば、資本としての資本の自覚は、単に端緒的商品においてだけでなく、そこからの上向の各段階の諸範疇においても、したがって、この上向の到達点としての向自的資本においても、また同時に実

現しているわけである。しかも、この到達点の向自的資本は、資本の本質的諸規定の関連が、たとえ对象的にという限定があるにしても、その全具体性において展開しつくされたかぎりで向自的なのであるが、しかし今も述べたように円環運動の完了したばあいには、この到達点の即自において向自的なのであるから、この形式の点において、それは、即自にして且つ向自的な資本、すなわち概念としての概念、資本としての資本である、ということが出来る。そして、これを内容の点から見ても、単に对象的に規定されたかぎりの資本全体であるというだけでなく、同時に、この対象化された全体の主体的に自覚された真の全体として考えられうるものでなければならぬ。このいみで、真実の背景の論理としての「全体から全体へ」という過程の出发点は、この到達点の資本でなければならぬということになる。そして、そのかぎりでも、全体の自己のこの自覚の論理が後退の過程としてしか描かれえないということも、ここに理解されうるわけである。したがってまた、上向的叙述の前進も、反省的悟性の立場からその外面的形態だけを見て、「部分から全体」への進展であるというだけのことではなく、自覚的後退との統一において、この前進の一步一步が即自かつ向自的であるというわけであり、したがって同時に、理性的立場から一步一步の自覚内容の状態をみるとしても、同じように、それは「部分から全体へ」の進展であるということができるのである。

そこでシェーマGにおいて、上向を表示する実線の半円を、これが理性的な概念的思惟の範疇的な自己展開の過程でなければならぬといういみにおいても、単に叙述の表面のみから見たものとせず、表裏一体であるものとして、叙述の背景の論理をも含めたいいみのものと理解するのを、正しいとするならば、他の破線で表示した半円は、逆に、裏を主にした表の論理過程そのものにすぎず、いいかえれば、上向に自己展開された諸範疇を、逆

の順で媒介的に辿ってゆくとこの後退的な自覚の論理過程をいみし、そして、これを表示するものと考えるべきである。そのいみで、背景の論理としてのこの自覚の過程は、全体から要素的部分へと進行していることになる。これが円環としての体系の論理構造でなければならないのであるから、この体系の叙述として、その出発点の最初においては、円環としての全体は潜在的であつて、実在的に顕現しているのは部分でしかなく、到達点において始めてこの潜在的な全体が実在的に顕現する。したがつて叙述の進展もまた、部分から全体へであつて、自覚の進行とは逆になる。このことを、さらに厳密に言えば、叙述の表面の論理が、円環としての完了的な全体を媒介にしたところの、要素的な部分から具体的部分における対象の全体へであるにたいして、その背景の自覚の論理は、具体化された部分を媒介にしたかぎりの対象の全体から要素的部分へということになる。しかしながら、その外に現れた姿においては、部分から全体へであるにたいして、逆に、全体から部分へということになる、というように右の引用文においては、述べておいたまでのことである。したがつて、図式における円環においても、部分は端緒の商品に、全体は到達点としての向自的資本に、それぞれ位覚づけられたものと考えてよいわけである。そこで、われわれは、ここに、——いままでの論述の結論としても、——『資本論』における上向的叙述の論理について、次のごとく言うことができるであらう。

——「要するに、部分から全体へ前進することは、全体自身の自覚として、自覚的全体への復帰であり、そして、この部分から全体へと、その逆との同一性は、一つの円環運動にある。」——

そして、この結論的要約は、そのままヘーゲルの概念的思惟の発展過程もっているところのものでもある。とすれば、ヘーゲルの概念的思惟に必然的な円環運動は、『資本論』の学的体系のうちにおいても、マルクスに

よって既に継承されていたものであったと、われわれは理解しうるわけである。しかしながら、ここで先きに注意しておいた重要なことを再び思い起さねばならないのであるが、それは、両者間における右の共通点にたいする差異の点を指摘することにもなるものである。すなわち、概念的思惟の自己運動が必然的に円環を描くという点の同一性にかかわらず、この同一形式の思惟運動が可能であるための要素的地盤は、ヘーゲルにおいては、純粹知識ないし純粹思惟であるにたいして、マルクスにおいては、かかる要素的地盤は商品として、思惟と感性との統一でなければならなかったということである。純粹知識も、対象と意識との間の一切の対立を止揚する過程（『精神現象学』）の結果に成立したものととして、両者の統一を原理とするものであったが、この止揚の過程において、感覺的契機が、したがって感覺的実在性そのものが、捨象され棄てられてしまっている。これにたいして、この感覺的実在と、これを消去したところに成立したヘーゲルのな思弁的思惟とを、さらに高い立場で矛盾的に統一せしめたところのものが、マルクスの概念的思惟を、したがって同時に、その必然的な円環運動をも、ここに可能ならしめている要素的地盤でなければならぬと、ここで再び繰り返して、わたしは主張するのである。というのは、『資本論』が、思弁哲学だけのものでないことに問題はないとしても、また逆に、これを単に経済学として悟性の立場からのみ扱うことにも強く反対することに、この主張は係わっているからである。要するに『資本論』は、系譜的にみても経験科学と思弁哲学との弁証法的統一において成立したことは自明のことであり、したがって科学と哲学との統一という学問的構造をもっていなければならないものであるからである。したがって、かかる学問的構造にあるかぎりでは、『資本論』の学的体系もまた、単に上向的な概念的思惟が必然的に描く円環運動だけにかぎるわけにはゆかないのであって、科学的な下向的分析の思惟過程と統一的に考え

ねば現実的になりえない、ということになる。とするならば、われわれが上述来、ヘーゲルの思惟の円環運動を『資本論』に適用して一応の成果を見たとしても、それは、現実の『資本論』の体系を一面的にのみ把握したかざりのものでしかなかった、ということになる。では『資本論』において、哲学的な上向的思惟の円環の運動と下向的科学的分析の直線的進行とは、如何に論理的に関連しているであろうか。

そこで再び、われわれは、ヘーゲルの円環運動の外的適用において理解されたかざりの『資本論』の上向的思惟の論理構造の問題に帰って、その分析的吟味を続けて見ることにしよう。さきに、上向的思惟の實在面の形態としての叙述過程は、階級的矛盾の全体的内容を媒介にした端緒的商品から向自的資本への弁証法的な前進であつて、この全体の自己自身による主体的な反省としての自覚の過程は、向自的資本から端緒的商品への後退であるとして規定され、したがつて、また、階級的矛盾の全体的内容が、全体という範疇で自らを即自的にも向自的にも顕現しているのは、上向的叙述の到達点としての向自的資本においてでなければならぬと規定されていたわけである。しかし、このばあい、この向自的資本を出発点とする後退的な自覚の論理を、上向的叙述の前進過程を媒介にするものと考えられているわけであるが、いま仮りに、かかる媒介をしないところの全体から部分への後退の論理だけを抽象して考えてみるとすると、全体的自己が主体的に自己媒介的に限定して一切の現実的諸規定を展開するということになり、要するに、全体的自己の自己自身による分析という觀念論的な思惟運動に、転化してしまふことになるであらう。

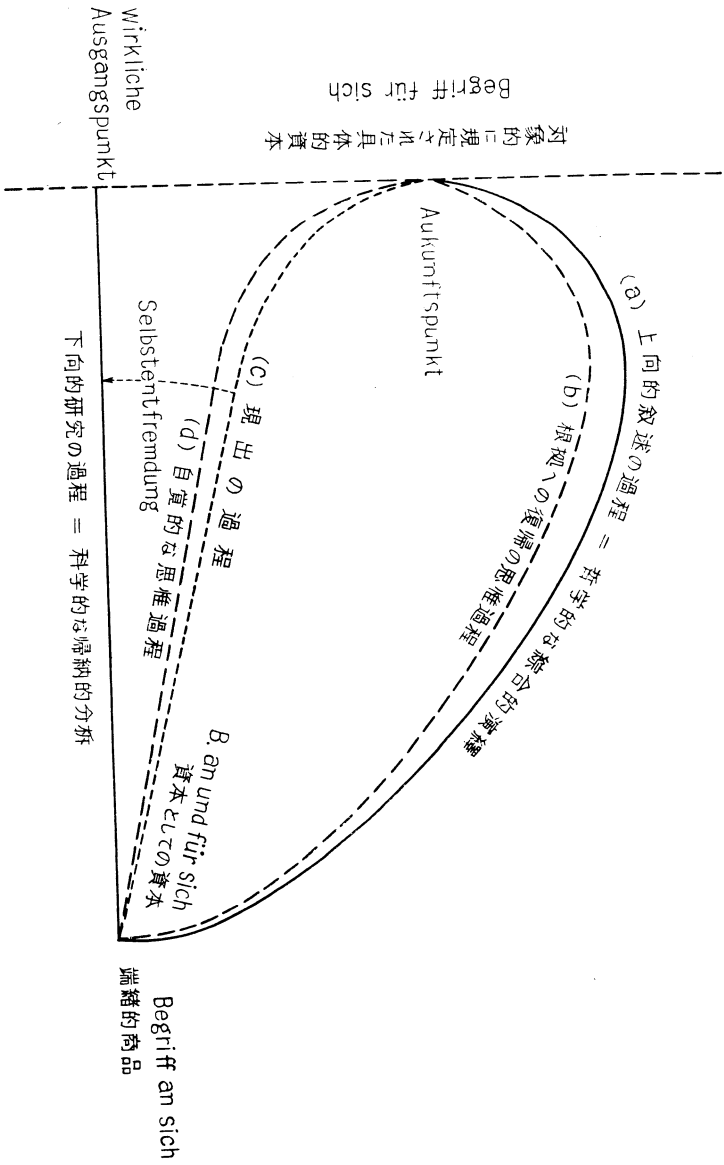
ところで、このような思惟運動は、この出発点としての全体の全内容を最初から完全に知りつくしたもので——絶対者ないし神——でなければ不可能なことである。そして、このような立場に立つて哲学したのがヘーゲルで

あるが、しかしヘーゲルといえども、この絶対者をその全具体性において展開しえたのは、その直接態における即目的規定から出発した上向的な叙述の最後においてであった。したがって、このような理性的思惟さえも媒介にせずして、いきなり絶対者の立場に立つということは、神秘主義だというほかはない。しかも相対的にして有限な現実のわれわれ人間を、最初から理性的なものと考えず、本質的には理性的でなければならぬにしても最初は感性的なものであると考える立場にあつては、われわれ人間の前に有るものは凡てが部分であつて、絶対的な全体なるものは、直接に感覺することができず、したがって、無いといわなければならぬ。このようなみで、わたしは前掲拙著所収論文の同一章節において、次のごとく述べておいた。

——「全体から部分への下向の途を最初から歩むことは、神秘的直観によるほかないのであるから、これを悟性的にたどらうとすれば、最初の全体は、すなわち感性的直観における全体は、これを全体として表象すれば、無でしかなく、あえて有とするかぎりでは、混沌とした個々の諸表象の総体にすぎないであろう。」——

そして、この「全体についての混沌たる一つの表象」を「現実的出发点」として下向する方法が、あたかも科学的研究の過程である。とすれば、この下向的な帰納的分析の過程というものは、円環的体系をもつ上向的な概念的叙述の、その背景の論理が外化して実存しているものと考えることができよう。これを、ヘーゲルの立場によつて言えば、神の自覚の論理が自己疎外におちいつて人間の暗中模索の方法に転化したものとも、譬えることができるであろう。さらに前節に掲げておいたシェーマGについて言えば、その（Ⅰ）および（Ⅱ）の（c）が、すなわち、概念的思惟の自己展開的な進行の過程（a）の到着点をば根拠として、そこから（a）の端緒を逆に実存せしむるにいたる思惟以前の現出過程が、感性的人間の意識に外在化して、トライ・エンド・

Schema I



『資本論』体系の図式的解明 (上の一) (続)

エラーの現実の研究過程という疎外の状態に転化していることになる。シェーマIは、第二節のシェーマBにおける上向的な直線を、前節のシェーマGの（I）のヘーゲルの思惟運動の円環によって置きかえて作製されたものである。このシェーマIにおいて、（b）の自覚的思惟の過程をも同時に、下向的研究過程のうち疎外的に実存するものとして、図示しなかったのは、この外在化の事実を認めないことをいみじいのであって、論理的順序としては、まず（c）が外在化することを、とりあえず、図示してみただけのことである。では、下向的研究過程において外在化して実存しているはずのこの（b）が、『資本論』の体系性において如何なる意味をもつにいたるかということについては、次号後節の「上向的叙述の現象論的方法」の箇所において、（b）としての後退的な根拠への復帰の過程を問題にするばあいに、関連的に論及される予定である。

したがって、この点の解明は後述にゆずることにしても、いまのばあい、シェーマIをシェーマHと見くらべて考察するならば、とにかく『資本論』の学的体系性ということについても、われわれは先ず第一に、このマルクスの著述においては、ヘーゲルの本来的に円環運動を描くかぎりにおいて体系的であったところの概念的思惟が、継承されているかぎりで、その端緒の商品から社会的総資本への上向的な概念的叙述も、それ自体として円環を描いて始めて体系的であると、言いうるのである。だがしかし、それにしても、この円環の半面としての後退的な自覚的論理過程は、それ自身としては顕現せず、ただ、これの疎外された実存形態としての下向的な研究過程においてのみ顕現するのであるから、われわれは次に第二に、この下向的研究過程と上向的叙述過程とによって構成される円環運動こそが、ヘーゲル哲学体系と質的に異なる『資本論』固有の学的体系であると考え、べきだと、主張せざるをえないということになる。とするならば、この結論的要約によって、前に提起しておいた問

題——上向的思惟の円環と下向的思惟の直線とが如何に関連して現実の『資本論』の体系となっているかの問題——は、ヘーゲルの円環的体系の思想を適用してみるという点においては、ここに破綻なく解決されたと考えてもよいであろう。シェーマIは、この関連を表示するためのものである。

八、経験科学からの外へと内へと二つの超出

マルクスは『経済学批判』『序説』の第三節でヘーゲルの概念的思惟を批判して、次のごとく述べたことを、読者は忘れてはいないはずである。

——「ヘーゲルの哲学的意識は、概念する思惟が現実の人間であり、したがって概念された世界そのものが、はじめて現実の世界である、というように規定されている。だから、この哲学的意識にとっては、諸範疇の運動が世界を生み出す現実の生産行為——遺憾ながら、それは外界から刺戟をうけるのあるが——として現れる」。すなわち、われわれの「頭脳が、ただ思弁的のだけ、ただ理論的のだけ、ふるまうかぎりにおいては、実在的な主体は、依然として頭脳の外部で、その独立性をもちつつ存続する」。しかるにヘーゲルは、この「実在的なものを、自己のうちに自己を総括し、自己のうちに深化し、自己自身から運動する思惟の結果であるとする幻想におちいったのであるが、しかし、抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、（実在的に）具体的なものを、一つの精神的に具体的なものとして再生産するための思惟にとっての様式にすぎない。だが、それは、けっして実在的に具体的なものの自体の成立過程ではない。」——

要するにヘーゲルは、現実の感性的な人間の思惟の働きにおいて、その本来の姿を純粹思惟の自己運動とみた

かぎりで、この哲学的意識がマルクスによって右のように批判されるほかなかつたわけである。すなわちヘーゲルは、感性的人間が思惟するという現実の事態を転倒して「概念する思惟が現実の人間である」と見ることになり、したがって、この概念的思惟の「諸範疇の運動が、世界を生みだす生産行為として現れる」ことになり、かくして、世界を思惟することによって創造しようとする立場、すなわち神の立場において、哲学をしたということになるわけである。しかしながらマルクスは、ヘーゲルのかかる思弁哲学における概念的思惟を批判するにあたって、この「抽象的なものから具体的なものに上向する方法」を、現実の感性的な人間にとつての「一つの思惟様式」として継承して、「思惟された総体としての具体的総体が、一つの思惟された具体的なものとして、事實上、概念的思惟の産物であるとするかぎり」では、右のヘーゲルの概念的思惟の自己運動が「世界を生みだす生産行為として現れる」ということも「正しいこと」として承認していたのであった。

このようなヘーゲルからマルクスへの継承関係については、すでに本稿の第二節において予め論述しておいたところであるが、したがって、前節までにおける全論述もまた、このような批判的継承関係を前提として続けられてきたことに問題はないはずである。そこで前節の論述にかぎるばあいは、この前提は次のような形態のものであったはずである。すなわち、ヘーゲルの思弁哲学が取るところの円環的体系は、神の立場にたつかぎりでの彼の概念的な思惟運動の必然的所産であつたにたいして、『資本論』の上向的叙述がしめす学的体系性は、ともかく現実的な感性的人間の立場に自覚的に立つたところのマルクスの概念的思惟の所産である、という形態での前提である。そして、このような系譜的関連を一応の前提としておいて、われわれは、ヘーゲルの思弁哲学を体系的であらしめるところの概念的思惟に必然的な円環運動を、『資本論』の上向的叙述の方法に適用して

みた結果、『資本論』を均しく体系的ならしむるはずのマルクスの概念的思惟に必然的な円環運動は、その現実的な形態においては、ただ単に上向的方法だけの範圍のものではなくて、いま一つの他の下向的方法としての科学的な悟性的思惟と、そして、この上向的な概念的思惟との統一として現れていると考えねばならない、ことを知つたわけである。いいかえれば、『資本論』の学的体系が上向的思惟様式だけのものではなくて、これと下向的思惟様式との綜合統一として理解されねばならないという本稿の最初に提起しておいた仮定的命題にたいして、前節におけるヘーゲルからの右の類推的適用は、それが論理的に可能であるという論拠を提供しえたわけである。

しかしながら、ここにおける論理的可能性ということは、論証する見透しがついたというだけのことであつて、いまだ現実に論証されえたことにはなっていない。すなわち、『資本論』における下向と上向との二つの方法が如何なる意味で論理的に統一されていることになつてゐるのか、いいかえれば、下向的方法として科学的にして悟性的な思惟様式と、上向的方法としての哲学的にして理性的な思惟様式との二つが、如何にして一つの思惟様式として統一的に見ることができなのか、という問題が解決されなければ、右の仮定命題をば真理として主張するわけにはゆかない。ところで、この仮定的命題は、『資本論』が普通に学的体系と見なされるころのその体系的叙述から看取されたものでなくて、『経済学批判』「序説」の第三節におけるマルクス「経済学の方法」の叙述から外見的に洞察されたかぎりのものであつた。そして、このマルクスの叙述においては、古典経済学までの近世の経済学の諸体系を貫いて発展してきた経験科学的な実証的方法と、ヘーゲルの思弁哲学における概念的思惟の方法との、弁証法的統一が要請されていたのであるが、その叙述から洞察されたかぎりのマルクス経済学の方法ないし体系についての、したがつて『資本論』の方法ないし体系についての、外見的な形態において、そ

ここに即目的に潜在しているはずのその本質的な論理構造を理解するためには、われわれは、ここに再び「序説」第三節の叙述に立ち帰って、そこにおける右の批判的継承関係の論理過程を、さらに明確に認識しておく必要があろう。そして、このばあいには、特にわれわれが銘記しなければならないことは、本節の最初に引用したマルクスの言葉に見たところであるが、彼がヘーゲルの概念的思惟の上向的方法を継承したさいに、述べた注意についてである。

——「頭脳の中で思惟された全体として現れる全体は、それに可能な唯一の仕方で（實在的な）世界をわがものとすると、思惟する頭脳の産物である。實在的な主体は、依然として頭脳の外部で、その独立性をもちつつ存続する。だから理論的方法にあつてもまた、主体が、社会が、前提として常に表象に浮べられていなければならない。」——

要するに、ヘーゲル的な概念的思惟は、ここに述べられた實在的な社会、物質的な主体についての「直観と表象との外での、あるいは、それらを超えての」のものであつたにたいして、マルクスは、対象的な實在的主体としての社会についての「直観と表象との概念への加工」をもつて、自らの「理論的方法」と決めたのであつた。ところで、この「理論的方法」において「概念への加工」といわれているところの、この「概念」を概念的思惟の上向運動とみるならば、そこまで「加工」という過程は、「直観と表象と」から出発するところの下向的な経験科学としての分析的思惟の運動のことでなければならぬ。とするならば、かかる「現実的出发点」をもつところの悟的な思惟の機能は、マルクスの「理論的方法」において、如何にして理性的な概念的思惟に結びついているであらうか、ということが当面の問題として、われわれにその解決が要求されていると考えねばな

らないであろう。しかしながら、この問題の解決に望むにあたって、われわれの注意せねばならないことは、マルクスの批判の対象としたヘーゲルの思弁哲学における概念的思惟は、「序説」第三節におけるマルクスの叙述だけによって理解されるばあいには往々、誤って読み取られているように、果して下向的な悟性の機能と全く無縁のものであるであろうか、という疑問を抱かざるをえないことである。そこで、われわれは、まず最初に、ヘーゲル自身が経済科学一般を如何に批判していたかを、正確に知っておくということが、ぜひ必要なことになってくる。

そこで、ヘーゲルの経験科学批判についてであるが、彼の思弁哲学は経験科学を軽視したところに成立したというものでは決してない、ということをおかれわれは先ず知っておかねばならない。すなわちヘーゲルは、科学方法論における悟的な思惟を単純に排除しようとしたのではなくて、むしろ、これを概念的思惟のうちに一契機として止揚せんとしているのであったのである。そして、そのために、さらに根源に遡って、経験、ということの、原理的意味を十分に認識していたのであった。すなわちヘーゲルは、次のごとく述べている。

——「思弁的思惟そのものの直接態、すなわち、その最初の抽象的な普遍性を考えるとき、哲学の発展が経験に負うところがあるということは、正しくかつ根本的な意味をもっている。なぜなら、第一に経験的諸科学は、個々の現象の知覚にとどまっているものではなく、思惟によって普遍的規定、類、および法則を発見して、科学のために材料を作り、特殊なものの内容を哲学に受け入れられるように準備するからである」(E. S. 12. A.)。このことによって「経験的諸科学は、それらの豊かな内容を、単に直接的なもの、見いだされたもの、並べられている多様にすぎないもの、したがって偶然的なものとして、示しているにすぎない形態を克服して、この内容

を、必然にまで高めようとする刺戟を、それ自体のうちに必然的にもっている（§ 12.）ということが出来るのである。このようにして第二に、經驗的諸科学は、この刺戟によって、「思弁的な思惟本来の現実的特殊性への無関心、ないし即自的な普遍性への自己満足」（§ 12. A.）から、思弁的思惟を引きずり出して「その自己自身からの発展へと駆りたてる。かく駆りたてられた思惟は、一方では、単に經驗的諸科学の豊かな内容を有るがままに受け容れる」（§ 12.）ことよって、「思惟自身も、主体的に自己自身の具体的諸規定を展開するよう強要されているわけである。思惟が、この内容に付着している直接性および所与性を除去しながら、この内容を受け容れるということは、同時に思弁的思惟の自己発展をいみする」（§ 12. A.）のである。

すなわち經驗的諸科学に潜む必然的な刺戟によって駆りたてられた思惟は、他方では、逆に、「諸科学の内容に、事柄そのものの必然性にしたがって現れ出たもの——すなわち、思弁的思惟の本来の自由な自己展開によつて現出したもの——という形態を賦与する」（§ 12.）のである。このような逆の働きかけによつて「哲学は、その発展を経験諸科学に負いながらも、經驗された目前にあるものをそのまま認するのではなくて、諸科学の内容に、思惟の自由という最も本質的な姿と、必然性の保証とを与え、現実の諸事実をして思惟の本源的な活動——完全に独立的な、したがって先天的に自由な活動——の表現たらしむるのである」（§ 12. A.）。

以上の引用文においても、近世に成立した自然および社会についての經驗的諸科学と、ギリシヤ以来の伝統にあるヘーゲル自らの理性的な思弁哲学とが、相互に如何に関連すべきであるか、の問題についての彼の思想を、われわれは、明瞭に理解しうるであろう。しかも、ここで特に注目すべきことは、およそ思弁哲学なるものが「理念の即自的な先天的普遍性に安住して自己満足におちいるばあい、もともと自己の特殊化への無関心、した

がってまた、自己の発展そのものへの無関心を、孕んでゐる」(§ 12. A)という危険性を、ヘーゲル自身が常に自覚していたということである。そして、この危険性の自覚において経験科学の積極的意義が評価されているのであるが、それは、まず、経験科学の悟性的思惟によって発見された特殊な諸規定、諸法則、諸内容こそが、思弁的思惟にたいする最初の材料として承認されているということであり、しかも、この前提的な材料の総体としての事柄に潜在する必然性そのものこそまた、思弁的思惟の即自的なものであるからして、経験的な事柄こそは、思弁的思惟本来の自由な自己発展を、外から刺戟し強要するものである、という評価である。要するに、思弁的思惟の最初の出発点だけでなく、その自由なる自己発展のための実体をも、経験科学の成果に負うているというのである。そして、このような経験ということにたいする原理的な理解が、ヘーゲルにあればこそ、彼の思弁哲学は、主観的観念論でなく客観的観念論でありえたと、われわれは考えねばならないのである。とするならば、彼のいわゆる「唯一の真実な方法」としての概念的思惟の自己運動なるものも、また、科学的方法のもつ悟性的機能の意義を、まったく軽視したものとは決して考えられないはずであろう。この点について彼自身も、次の引用文において明瞭に述べているだけでなく、この引用文は、その括弧に入れたわたしの註解の語句にたよるまでもなく、われわれには特に注目すべき方法的思想を展開しているものとしなければならぬ。

——「反省的悟性の働きは、具体的な直接的実在を超え出て、これを規定し分離するにある。(すなわち、現象の世界を超えて本質の世界に下向し、これを分析的に規定して、現象界と本質界とを分離するのである)。しかし反省は、同様にまた、さらにこの自分の分離する(固定された)諸規定をも超え出て、まず、これらに関係させなければならぬ。ところで、この関係づけの作用は、それ自身、理性に属する。その規定そのまま

の（悟性の）の立場を超えて、これらの諸規定間の矛盾にたいする洞察にまで達するということは、理性の真の概念に到る（ところの向上的な概念的思惟の）ための偉大なる否定の歩みである。けれども、（悟性の立場に囚われた）不徹底な洞見は、この自己矛盾におちいるものが理性であると考える誤謬におちいる。それは、この矛盾こそ、すなわち理性が悟性の制限を超越することであり、制限の解消であるということを、認識しなすのである。そのために、そこからして、さらに究極の点へ（上向するため）の思い切った第一歩 *den letzten Schritt* を踏みだすかわりに、認識は、悟性規定にたいする不満から、感性的実在のなかに舞い戻り、このなかにのみ確実なものがあると思ひこみ、これを唯一の根拠としようとする（単なる実証主義にとどまる経験科学の）誤謬におちいる（G. I.-S. 29）。——

右の引用文は、マルクスの科学的下向と哲学的上向との統一としての方法論的思想の根拠、すなわち、悟性的な下向が如何にして理性的な上向に方向を転換せねばならないかの根拠にたいする、ヘーゲルの立場からの解明になっているものと見ることができるとすれば、また同時に、マルクスのかかる方法論にたいして、その原型が、ヘーゲルの思弁哲学のうちに既に暗示的なものとして潜在していた⁽¹⁾というように、われわれは考えてもよいわけである。

(1) ヘーゲルとしては、近世に成立した経験科学の方法を特徴づける悟性の立場をば、哲学の領域において基礎づけたところの、カントの『第一批判』における論理学的思想にたいして右の批判的叙述をしたわけであるが、ここでは、カントが悟性の機能を現象界の認識のみに限定して物自体を認識論的に未解決の問題として残したことにたいし、ギリシヤの古い形而上学に帰って「事物 Ding」とその思惟とは全く一致するものであり、その内在的諸規定としての思惟と事物の真の本性とは

同一の内容だと見る思想」を継承すべきであると主張してのことであった。残された物自体の問題は、シェリングの先験的観念論によって、「理性が自分自身で自己の規定を叙述する」ことのできる方向へ認識論的に解決する端緒が作られたのであったが、この端緒の意義を認めて、理性的な思惟の向上運動の論理を展開したのは、いうまでもなくヘーゲルであった。

この哲学史的發展方向にもかかわらず、それ以前のカントのごとく、この理性の認識論的機能を、単に主観的なものと決めてしまいかぎりでは、外から感性的知覚によって与えられる質料の内容が必要なものとなり、この内容から切り離された認識能力としての——もはや総合的な理性でなくて分離的なものに転落しているところの——悟性の形式のみが問題になるということになる。このように認識における質料と形式との分離、いいかえれば真理と確実性ということとの差別は、カントの批判哲学にかぎらず普通に論理学と呼ばれるものに共通する謬想であると批判して、ヘーゲルは、理性の立場による兩者の綜合統一を主張したのであった。そしてマルクスも、またこの理性の立場における概念的思惟の方法を、ヘーゲルから批判的に継承しているというわけである。

さて右の引用文によれば、経験科学というものは、その下向的分析によって抽象された普遍的諸規定を悟性的に固定せしめるにすぎない。そしてさらに、これらの諸規定の執れかを任意に択んで原理となし、この仮定的な原理によって、下向的分析のための「現実的出发点」において直観され表象された諸事実を説明して見ようとする。あるいはまた別に、この仮定の原理からの演繹的説明という悟性的な検証を徹底的に遂行する——この頑強にして執拗な実践力自体もまた「悟性の権利と功績」(§§ 2)であるわけである——ことに堪ええなればあいには、悟性的規定の抽象性と固定性にたいし、感情的に反撥し、融通無下に流動するところの「現実的出发点」に舞い戻って、理論的な不確かさと曖昧さとのままで経験的諸例証を拾い歩くことになる。しかしヘーゲルが、学問的な歩みとしての「唯一の真実の方法」のために通路としたものは、右の悟性の立場にとどまるかぎりの、

抽象的原理に偏執するか懷疑的な経験主義に墮するか岐路にたつて、その執れの路をも斥けた第三のものであった。そして、悟性的に固定された諸規定の総体としての外的な事柄において、そのうちに秘む内容的必然性を洞察し、この必然性を自覚的に顯現せしめようとする「思い切った第一歩を踏みだす」ことによって、新な路を開拓することを、主張しているのである。

さらに、客観的な事柄における悟性的諸規定間の矛盾ということとは、この同一の事柄の外と内との矛盾であつて、この矛盾の止揚という「偉大なる否定の歩み」を強調しているのである。この「偉大なる否定の歩み」なるものは、それ自体、理性的なものであるから、この理性の立場に立ちえないかぎりでは、この主体的な否定の事柄そのものをもつて矛盾を惹き起す原因と考える。すなわち矛盾は、もともと客観的に実在するものなるにもかかわらず、現象界の相互に差別された有限な諸規定の外的併列に満足しないで、それらの内在的相互連関を思惟する理性の立場に進むかぎりでは、自己矛盾——カントのアンチノミー——におちいらざるをえないというように主観的なものにしてしまうのである。これに反してヘーゲルは、同一の客観的な事柄の外的形態を否定する内的内容を洞察し、これを思惟することをもつて、そして、「有限な諸規定が自ら止揚して、反対の諸規定に移行する」(E. § 80.) こと的事实を認識することをもつて、理性そのものの一つの本性であり、对象的に実在する矛盾を把握するための唯一の方法と考えていたのである。そして、かかるいみでの理性の「偉大なる否定の歩み」のことを、「理性の否定的側面」あるいは「概念的思惟の弁証法的契機」(§ 79, § 80.) と呼んだのであった。

そこでヘーゲルの経験科学批判の問題に帰るとするならば、ヘーゲルとしては、悟性的原理に偏執するか懷疑論的な低迷におちいるかの経験科学自体のうちににおける岐路に直面したばあい、この岐路を避けて外へ超出して

しまうのではなくて、この岐路を内に超出するために、われわれの理性自身の右に述べた弁証法的契機としての「偉大な否定の歩み」を「思い切つて踏みだす」ことによつて、「唯一の真実の学問の路」を開拓することができる、と主張していることになる。したがつて経験科学自体もまた、その下向的分析によつて抽象した普遍的規定を、単に悟性的に固定せしめるにとどまることなしに、この規定をその内容の流動的な全体において——その否定性において、したがつて弁証法的に——把握するならば、思弁哲学の概念的思惟（上向的演繹）にまで前進しうる可能性にある、と主張しているわけである。しかしながら、事実としては、これに反して、あくまで悟性の領域に踏みとどまるところに経験科学の近世的学問たる所以があるとすれば、この科学の提供する豊富な内容を受けいれるための方法、すなわち、悟性的な下向を理性的な上向に転換せしめるという弁証法的契機——これこそ端緒の論理的意味であるが——は、やはり理性の立場にある哲学自体の解決すべき問題として、自らの領域に引き受けざるをえないものでなければならぬ。そのかぎりでは、この理性的思惟の端緒の問題を重視して、彼の思弁哲学を打ち立てたのであるが、しかし、それは経験科学の領域においての、そこに踏みとどまるための哲学の問題——すなわち科学方法論の問題——としてではなくて、経験科学から外に脱出するための哲学の問題としてであった。それにしても、この思弁哲学が「理念の即自的な先天的普遍性に安住して自己満足におちいる」危険性を、ヘーゲル自身が常に自覚していたということ、そのかぎりでは、彼の概念的思惟の自己発展は、実在的内容のそれをも同時に意味せしめることができたということ、このことについては、さきにも述べておいたとおりである。それにもかかわらず、彼がこの自覚に、すなわち、経験科学の提供する特殊の現実への関心に、徹底できずに終つたというところに、そして、これに徹底しえたものがマルクスでしかなかったとい

うところに、われわれの考えるべき問題があろう。

ところで、この問題は、ヘーゲルが結局のところ、科学の立場を哲学の立場と対等に重要視することがなかったという事実によつて、端的に解明することができるであらう。すなわちヘーゲルは、経験科学は思弁哲学のための素材的内容ないし媒介的手段であり、そこに止揚されるべき不可欠な前提である、とする一方的関係だけを見ているのであつて、思弁哲学もまた逆に経験科学のうちに止揚されるべきはずのものとする他方の関係は、彼の立場そのものから許されないことであつた。これにたいして、これら双方の関係を対等に承認したうえで学的体系を樹立したのがマルクスである。

ヘーゲルにおいて学的体系は、理性的であるとともに現実的であることを目指していながらも、しかも、この「現実こそが哲学の唯一の内容である」(Forsg.)と彼自ら主張しながらも、この現実性は、その完全な具体性を少なくとも感性的実在の世界においては、發揮できず、そのかぎりでは歴史的現実における真に理性的なるものを認識することもできなかったのである。ここに古典経済学の伝統に立つて、そのうちに、かかるヘーゲルの思弁哲学を止揚するという必然性が、マルクスによつて自覚されざるをえない理由があつたわけである。そして、このことは、マルクスがヘーゲルから理性の立場における概念的思惟の方法を継承したときに、ヘーゲルの概念的思惟の外に、なお感性的実在が主体的に存立していること、しかも、それ自体で自己發展する自然的な論理をもっていること、要するに、客体的な歴史的現実の發展過程を、物質の自己運動として既に認識していたことによると、われわれは考えなければならぬのである。ここに、経験科学の悟性的機能をヘーゲルよりも明確に承認し、この機能に自律性を与えたいうで、この自律性の否定に成立する理性の他の自律性との、相互に排除しあ

う矛盾の解決として、科学としての下向と哲学としての上向とを、マルクスは、統一的に把握するほかないイデオロギー的な必然性にあつたわけである。そして、マルクス主義経済学すなわち『資本論』における上向的叙述の過程は、この後者の哲学としての上向的な概念的思惟が、ヘーゲルのそれと同じく描かざるをえなかつた円環運動の、その前進的な半円の過程の表現されたものであつて、その後退的な半円の自覚の論理過程は、叙述のうちに直接に表現されていないところのマルクス自身の実証的な研究の下向過程として、疎外されて実存しているというわけである。このことについては、シェーマHの解説として論述してきたところであつた。

九、上向と下向との矛盾の統一としての円環的体系

経験科学としての古典経済学の批判的継承の過程において、ヘーゲル哲学の概念的思惟の方法を止揚する、というイデオロギー的な系譜的関連から見るとき、マルクスの経済学すなわち『資本論』は、前節の最後に述べたように、方法論的には、経験科学の研究方法としての帰納的分析という下向的な思惟様式と、思弁哲学の叙述方法としての総合的演繹という上向的な思惟様式との、両者の綜合統一でなければならず、しかも、それぞれの自律性を喪失しないままで対立している両者の間の矛盾の統一でなければならぬ、ということになる。そして、このような経験科学の悟的な方法と思弁哲学の理性的な方法との相互矛盾的な統一にあつて、しかも有機的に関連している全体が、『資本論』の学的体系性であると、われわれは理解することができるのである。

ところで第七節までに、われわれは、次のことを理解してきていたはずであつた。すなわち、『資本論』が学的体系性でありうる所以のものは、マルクスがヘーゲルから批判的に継承してきた概念的思惟の自己展開が、必

然的に円環を描くということにあるのであって、そして、この円環運動における前進的な半円としての対象規定の論理の進展が、『資本論』の向上的叙述の過程に直接的に現れ、他の半円としての後退的な自覚の論理の進展が、その叙述のための前提であったところの downward な研究過程のうち自己疎外的に実存している、といういみで、向上的叙述と downward の研究との両過程の総合的全体は、学的体系たりうるための思惟の円環運動を、それ自体のうちに潜在せしめている。いかえれば、マルクスがヘーゲルから批判的に継承してきた思惟の円環運動なる思想が、downward の研究過程と upward の叙述過程とを統一的に把握せしむる論理的根拠になっている、ということであった。すなわち第七節においては、われわれは、『資本論』の学的体系性というものが、単に向上的なその体系的な叙述だけに存在するのではなくて、この upward の叙述と downward の研究との総合的全体のうち存在している、ということの理解を、論理的な意味から成就してきていたわけであった。したがって、前節の最後に述べたところの、かかる総合的全体を学的体系性と考えて『資本論』を書くほかなかつたマルクスのイデオロギー的必然性ということ、このことにたいする論理的説明は、われわれには、すでに成就されているということになるであろう。

そこで、われわれが一步すすめて説明しなければならぬことは、『資本論』のかかるいみの学的体系性において、総合的に統一されている両過程が、如何なる相互的な関連にあるか、ということである。両過程が、それぞれ自律的原理を喪わず独立しているながら相互に依存しているという自己矛盾にあつて、しかも有機的な相互連の統一を形成しているといつても、それだけでは、いまだ外形的な規定にすぎないのであつて、かかる相互関連にある両過程それぞれの論理構造にたいし、如何なる新たな規定が、マルクスにおいて付け加えられているかの問題は、未解決のものとして残されているはずであろう。

さて、この未解決の残された問題の解決に向う段取りとして、われわれの着手すべきことは、いうまでもなく、かかる有機的関連にある両過程がそれぞれにもっているところの自己矛盾が、如何なる論理構造のものであり、この構造によつて如何に自己運動をして新たな規定を如何に展開しているか、という事柄そのものを分析するということに、あるであらう。しかしながら、この事柄は、両過程が事実上かかる自己矛盾的な論理構造によつて一つの円環を形成しているという全体的な事柄にたいして、部分と全体との関連において、問題としては帰一するところのものである。そこで、われわれとしては論述の都合上、この後の全体的な事柄から解明してゆくことにしよう。ただ、そのばあい、われわれの反省しておかねばならないことは、この全体的な事柄は、ここでは、いまだ一つの想定にすぎない、ということである。いいかえれば、下向的研究過程と上向的叙述過程とが事実上、一つの円環運動を形成しているはずだと、われわれは、その論理的な可能性とイデオロギー的必然性とから、その現実性を推定したまでのことにすぎなかつたのである。しかし、このような想定は、やがて論証されねばならないものとして、今は、これを前提として、以下の解明的な論述に入るよりほかに方法はないであろう。

ところで、右の二つの過程が一つの円環運動を形成しているという想定は、同一の思惟様式に必然的な円環運動が、二つの部分的な過程において、それぞれの異質的な形態を示している、ということの想定であることに問題は無い。二つの部分的過程を規定する思惟様式が別々のものであるならば、円環運動ということも外形だけのものにすぎないはずであるからである。とすれば事実上、単に形態の上からだけでなく本質的規定においても異質的なものとして差別されている両過程は、如何なる同一の思惟様式によつて、貫かれていると見るべきであろうか。この問題もまた、二つの過程のもつ異質的な両規定の矛盾の統一としての同一の規定性にある、というよ

うに想定してかかるよりほかに、いまのばあいは仕方がないであろう。とすれば、この同一の思维様式は、両規定を弁証法的に止揚したものととして、帰納的にして同時に演繹的、悟性的にして同時に思弁的、科学的にして同時に哲学的という論理構造をもつところの、同一の規定性にあり、したがって、下向と上向との執れもこの同一の思维様式によつて一貫されていると考えられなければならない。したがって、普通に理解されているように、下向過程のみが科学的、悟性的、帰納的なものとして、上向的な叙述の初まる以前に実存していたというように考えることは、不可能なこととなるわけである。そして、さらに上向過程もまた、逆に単に哲学的、理性的、演繹的なものとして、いままでわれわれの論述してきたとおりに、単純にヘーゲルの規定を適用してみただけに満足してはならない、ということになる。ところで、このことについて、わたしは前掲拙著において、次のごとく述べておいた。

——『資本論』における方法が「悟性的即思弁的な分析である」ということは、下向としての悟性的分析の窮極原理としての有の仮定性を自覚して、ただちに無とすること、すなわち、分析の窮極点を綜合の端緒に反転して作用化せしめることである。そして、ここに、歴史的現実の自己運動を思弁的な演繹によつて範疇的に再構成することのできる根拠があるのであるが、かかる認識体系の各段階においても、したがって下向的な悟性的分析の段階においても、その結果において到達される端緒的な綜合原理を、無自覚に前提しているだけでなく、最初から、この前提を自覚しているわけである。したがって、これは、最初からして綜合的見地からの綜合原理の分析であつたわけであり、全体的自己の自己自身による弁証法的分析であつたわけである。」——

すなわち、帰納的分析としての科学的下向の過程は、その本来の姿としての思弁的な、したがって綜合的にし

演繹的な、哲学的自覚の論理をば、自覚していなければならぬといふのである。そして、この本来的な姿の自覚においてのみ、研究過程としての下向的方法なるものは、上向的叙述と円環関係を結ぶことができるのであるから、この同一の円環関係におけるかぎりの下向的研究過程は、科学的、悟性的、帰納的な性格にある形態において実存していても、そこに、上向的叙述の哲学的、思弁的、演繹的な論理を、目的として内在せしめていなければならない。したがって、このような上向的叙述の方法を最初から媒介してのみ、同一の思惟様式に必然的な円環的運動の一契機ないし一側面となりえているものと、考えねばならない。そして既に、かかる実存形態において同一の円環運動の一契機となつてゐるものとしては、それ自体で自律性をもつて存立し、かえつて上向的叙述を自己自身の目的のための手段として媒介する必然性にあるものと考えねばならない、といふことになるのである。十七世紀以来の経済学が、その上向的叙述を展開しはじめて漸やく体系をもつた理論科学になりえたという事実が、まさに、この論理の無自覚的な表現であつたわけである。これと反対にヘーゲルにおいては、哲学のみが主体的自律性をもつていて、科学は、ただその手段的な意義しかもたなかつたのであるが、もし、われわれが、『資本論』の体系的円環においても、科学的研究過程を単に上向的叙述過程の媒介的手段としてのみ考えるとするならば、それは、マルクスを単純にヘーゲルののみ見たことになるであらう。このヘーゲルの思弁的方法と古典経済学の悟性的方法との対立を止揚したかぎりのものとして、マルクスの体系的方法は、哲学的、思弁的方法と科学的、悟性的な方法との両者の自律性を認めたらうと、相互に媒介しあうものと理解せざるをえないはずのものであつた。

このような理解が、われわれに可能であるためには、科学的研究過程もまた、その自律的な自己目的性を持つ

ていて、哲学的な上向の思惟過程を手段的に媒介するという一側面を、マルクスの体系的の方法の一契機として、われわれは、認識しておかねばならないのである。要するに、上向的叙述と下向的研究との両過程は、相互に独立した面をもちながら他面において依存しあうという関係、いかにえれば、相互に他者を手段的に媒介するという自律性にありながら、同時に、他者のために媒介的手段でもあるという従属性にある、という二重の関係において、相互媒介的な有機的統一としての学的体系をなしている、と主張しうるのである。この主張は、まえには想定にとどまった前提であつたが、ここにいま、一応の論証が成就されえたというわけである。

ところで現実に『資本論』が、このような論理構造の有機的全体としての学的体系であるかぎりで、その一方の契機としての下向的な帰納的分析の方法にも、最初から演繹的综合を自己自身の本質ないし目的として内在せしめており、したがつて、かかるいみで思弁的な意味を内在せしめている、と先きに述べたことも、ここに肯えるわけであるが、これと同時に、上向的な概念的思惟の自己展開の過程も、ヘーゲルにおけるがごとき単純に思弁的な演繹的综合ではなくて、下向的な帰納的分析と統一されたものであることを、われわれは特に認識しておく必要がある。それにしても、『資本論』の上向的思惟がヘーゲルの概念的思惟を批判的に継承したものであるかぎりのものとしては、マルクス自身が、かかる帰納的内析との統一という新なる規定を、如何にして付加することが論理的に可能であつたかを理解するためにも、ヘーゲルの概念的思惟そのものの論理構造を、われわれはまた、前もつて正確に認識しておく必要がある。このばあいに、最初に知っておかねばならないことは、さきに述べたところの、経験科学の悟性的立場を理性的立場に轉換せしむるための「偉大なる否定の歩み」なるものが、単に概念的思惟の端緒においてだけの弁証法的契機であるのでなくて、さらに、この概念的思惟の自己発展

の過程そのものにおける弁証法的契機でもある、ということについてである。このことについてヘーゲルは、次のごとく述べられている。

——「学的進展の方法を獲得するために必要な唯一の点は——この過程のもつとも単純な洞察を獲得することこそ何よりも大切なことであるが——次のような論理的命題を認識することである。すなわち、否定が同じようにまた肯定的なものであるということ、あるいは、自己矛盾のものが零に、すなわち抽象的な無に、解消するのではなくて、本当は、ただその特殊な内容の否定に解消するにすぎないものだということ、いいかえると、このような否定が全称的な否定ではなくて、もともと解消するはずの特定の事柄の否定であり、したがって特定の否定だということである。それゆえにまた、結果のなかには、その結果を生んだ原因が本質的に含まれているということになる。なぜなら、そうでないとすれば、それは直接的なものであつて結果ではないであろうからである。それで、結果を生ずるものとしての否定は、規定的な否定であるからして、否定は内容をもっている。この規定的な否定は、一つの新しい概念になっているのであるが、先行の概念よりは一段と高い、しかも一段と豊富な概念である。というのは、この否定は、その先行概念の否定のために、あるいは、その対立者のために、それだけ豊富になつたからである。それゆえに、この新しい否定は、先行概念を包含しているが、しかしまたさらに、先行概念よりも多くのものを包含しているのであつて、その点で、それは、先行概念とその対立者との統一である。——概念の体系は、一般に、このような道程のうちで形成されねばならないものであり、不断の、純粹な、外部からの何ものも取り入れない過程のうちで、自己自身を完成しなければならぬものゆゑである。」(G. E.-S. 39-40)——

ここで明瞭に述べられているように、ヘーゲルにおける弁証法とは、すなわち、彼自身が「真に弁証法的なるもの」と呼ぶものは、「概念が自己自身のうちにもつところの否定的なもの」(S. 41-42)のことであって、そのかぎりでは、概念的思惟の自己運動としての「学的進展を、内から動かす魂」であり、この進展の一步一步において「孤立的な諸規定を、その真の姿において、すなわち、それらの内在的な連関と必然性において示す」という「有限なものからの内への超出のための原理」(E. S. I, A.)である。そして、このような弁証法的原理によって内から衝き動かされてゆく概念的思惟の自己展開の方法をこそ、まえにも述べたとおりヘーゲルは、学問にとっての「唯一の真実の方法」と自認したのであった。ところで、かかるヘーゲルの概念的思惟の自己展開が、客観的な実在の内容そのものの必然的發展を同時にいみしていたことを、ここに繰り返し想起しておくためにも、この「唯一の真実な方法」についての彼自身の主張に、いま一度、ここに注意しておくことにしよう。

——「この方法が、その対象や内容と何ら異なるものでないことは、自明であろう。というのは、この内容を動かすところのものは、内容それ自身であり、すなわち、内容がそれ自身においてもつところの弁証法だからである。それで、この方法の過程にしたがって歩まず、この方法の単純な律動にしたがわない如何なる叙述も、学的なものとは見られないことは、明瞭である。なぜといえば、そののみが事柄そのものの過程であるからである。」(G. L. S. 40)——

ところで、この方法——客観的实在自体の発展と、それについての概念的思惟の発展との両者を貫く方法——の単純な律動は、さきの引用文において明瞭にされてあるように、全称的な否定でないところの規定的な否定、特殊的内容の否定として新たな内容を創造する否定、いかえれば、それ自身で肯定的であるような否定によ

つてのみ可能なことであつた。この肯定的な契機、あるいは「弁証法的過程における肯定的な成果」のことを、ヘーゲルは、「思弁的なもの」と呼んでいる (§ 82, A) のであるが、これについて次の言葉は、十分に味読されおかねばならないであろう。

——「肯定的なものを否定的なものの中に把握し、したがって反対を統一のうちに把握することの中にこそ、すなわち弁証法的なものの中にこそ、思弁的なものが把握される。これは、弁証法のもつとも重要な面であるが、まだ未熟な、自由になつていない思考力にとっては、もつとも困難な側面である。この程度の思考力が、具体的な観念や小理屈をこねる段階からの脱却の途中にあるときには、それは、まず抽象的に思惟することを練習し、概念を、その規定性の中でつかみ、それらの概念にもとづいて認識することを学ばねばならない」。

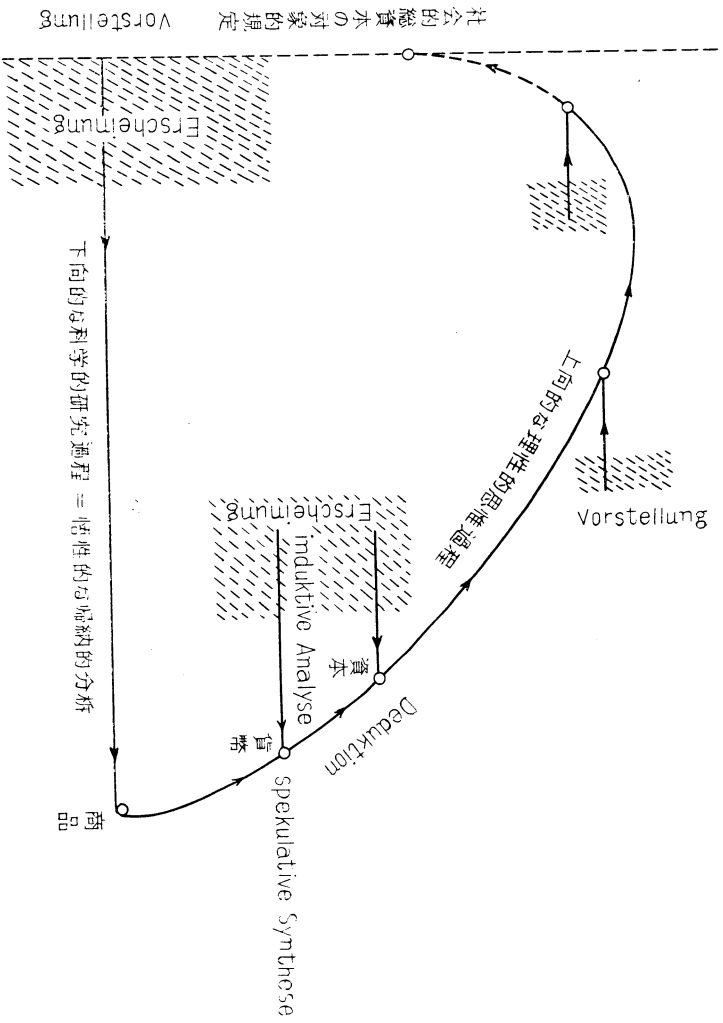
(G. I-S, 43)——

したがつてさらに、われわれも、『資本論』におけるマルクスの上向的思惟をもつて、ヘーゲルの概念的思惟の批判的継承であるとするかぎり、同じく弁証法的なものとして理解せねばならぬ立場に立つ以上は、そのこの範疇的自己展開の一步一步を、否定的であると同時に肯定的であるものとして、したがつて弁証法的であると同時に思弁的でもあるものとして、——したがつてさらに、それが自己矛盾であるとともに総合的統一によるそれの解決でもあるものとして、——認識することの練習も、また必要とせねばならない。要するにヘーゲルによれば、理性的思惟は「弁証法的あるいは否定的な側面と、思弁的あるいは肯定的な側面と」 (§ 79) を、もっているのであつて、そして「この思弁的あるいは肯定的な理性は、対立した二つの規定を、すなわち、対立した二つの規定の解消と移行とのうちに含まれている肯定的なものを把握する」 (§ 82) 機能であると、されているのである。

さて、以上に見てきたようなヘーゲルの理性的な概念的思惟の論理的構造は、『資本論』の上向的叙述における思惟方法にも、本質的なものとして継承されているのでないであろうか。ヘーゲルにあっては、概念の自己運動が、そのまま、概念の対象としての事柄自体の内容の自己展開と直接的に一致しているものとして、その区別の面よりも同一性の面が強調されるわけであるが、これに反してマルクスにおいては、対象自体の歴史的な自己運動は、概念的思惟の論理的な自己展開とは外的に対立するものとして、両者の差別さるべきことが明確に主張されている。しかも、この点においてこそ、彼がヘーゲルの概念的思惟を概念的であるとして批判しえたのであるからして、彼の上向的思惟が、ヘーゲルと同じく理性的なものとするも、その弁証法的契機といわるべき否定性は、現実的内容と直接的に同一であるとされているところの、理性的概念そのもののうちにおける特定の内容にたいする否定性のことでなくて、概念的思惟と外的に対立する客観的実在の悟性的に規定された内容にたいする否定性でなければならない。そのかぎりでは、ヘーゲルの概念的思惟の弁証法的発展といえども、すくなくともその端緒においては、同じように悟性的立場から理性的立場への転換であったわけであるからして、マルクスは、ヘーゲルの概念的思惟の弁証法的な発展過程の一步一步における否定性ではなしに、それらの原型としての、この過程の端緒における最初の「偉大なる否定の歩み」を、批判的に継承したのであった、とわれわれは言うことができるであろう。

ここに批判的というのは、ヘーゲルが悟性的な科学の立場から思弁哲学へ脱出したことにたいする批判のことである。マルクスは、飽くまで経験科学としての経済学の埒内に踏みとどまって、経済学そのものの理論化のための、したがって体系化のための「学問的に正しい方法」を打ち出したということについては、繰りかえし述べ

Schema J



『資本論』体系の図式的解明 (下の一) (続)

てきたところである。かくて、ここに、概念的思惟のための端緒における「偉大なる否定の歩み」は、これがマルクスに継承されたかぎりのものとしては、経験科学としての近代の経済学からの「外への超出」ではなくて、それからの「内への超出」として、この経済学そのものうちにおいて無自覚的に歩まれていた理論化ないし体系化の方法を、反省するという科学方法論としての哲学への「偉大なる否定の歩み」であった、とわれわれは言うことができる。とするならば、『資本論』の向上的叙述における概念的思惟の自己展開なるものも、マルクス主義経済学を理論的に展開するための哲学的な方法であるということに問題はないであろう。

学的体系化のための方法としての『資本論』の向上的叙述は、このようなものとしては、古典経済学が近世の初期以来の経験科学としての伝統にあるかぎりの、その科学たる所以の downward 的研究を不可欠な一つの要素としなければならず、そして、いま一つの不可欠な要素としての哲学的契機との統一こそが、向上的叙述を可能ならしむる要素的地盤となるのである。そのかぎりでは、それは、帰納的分析と演繹的綜合との統一であり、悟性的思惟と理性的思惟との統一であるような、特殊な思惟様式にもとづくものと考えられねばならないのである。ところで、この悟性的思惟と理性的思惟との統一が如何にして成就されるかという論理的な問題に、われわれは当面しているわけであるが、これについては、マルクス自身としては、ヘーゲルの概念的思惟の端緒を発見するための方法を、批判的に継承していると考えられたかぎりでは、悟性的諸規定を弁証法的に否定して、ここにおける矛盾、すなわち外的に固定された部分的な規定と内的に反省された全体的な内容との対立を、思弁的に綜合するという仕方では、悟性的思惟と理性的思惟とを統一しているということが出来る。事実としても、『資本論』における向上的叙述は、一つの範疇から次の範疇に移行してゆくばあいは、より単純な範疇からの演繹であることに問

題はないが、この概念的思惟においては、常に、より単純なる範疇によつて新たに見わたされる現象的な諸事実を帰納的に分析し、ここに抽象される本質的事実ないし概念的規定と、かの単純なる範疇との思弁的綜合において、より複雑なる範疇が演繹される、という論理の展開を示している。——このことを、ころみに図式に表示してみれば、シエーマJのごとくなる。——すなわち、つねに悟性的分析を媒介にした思弁的綜合という方法によつて、範疇のかかる弁証法的な自己展開が行われているのである。⁽¹⁾したがつて上向的叙述においては、下向的研究過程において思弁的な意味がただ潜在せしめられていたのに反して、そこに統一されている悟性的契機を、単に意味として内に潜在せしめるのではなく、それを外に顕在せしめ、上向的方法の具体的な契機として現実の叙述のなかに有機的に織り込んでいるのである。この点の理解は重要であるから、さらに前掲拙著の同一章節から、次の文章を引用しておく。

——「マルクス自身が叙述の方法から区別した研究方法としての材料の蒐集、分析、抽象の過程が、全体としての下向の過程であることに問題はないが、しかし、ただこの過程のみを下向的とみることは、外見に囚われた誤謬であつて、背景の後退の論理の現象した形態が、すべて下向的な實際の研究過程なのである。これが謬想であることは、現実の叙述が、徹頭徹尾上向的演繹でありえず、帰納的下向を弁証法的に挿入せざるをえなかつた——たとえば第一、二節以外の第八章の全体の、その他——という叙述過程そのものに、現象して実存しているところの、他の部分的な下向の諸形態を、見うしなうという結果からみて、明かであろう。」——

そして第一章「商品論」の第一、二節における分析的叙述も、商品からの貨幣、資本へと概念的に演繹される上向的論理に、総合的に統一されたところの最初に現れた下向的分析の例証と見ても差し支えないわけである

が、それ自体は、下向的研究過程の先端に位する悟性的立場のものであり、しかも第三節の理性的立場に転換する論理こそは、上向的な概念的思惟のための端緒を形成する、という特殊の意味をもっているものである。

——「端緒としての要素的商品にたいする分析を、仮りに単なる外的反省としての科学的分析であるとしても、それは、ただちに自己を否定して止揚さるべき運命におかれてゐるわけで、どこまでも悟性的な帰納的分析にとどまることはできず、まもなく思弁的な演繹的綜合に復帰せざるをえないのである。」——

ところで、ここに述べられている悟性の立場から理性の立場への轉換の論理は、ヘーゲルにおいては前節で述べてきたとおり、概念的思惟がその成立と前進とのための端緒を発見するところの論理として、そこに「偉大な否定の第一歩」という弁証法を強調した轉換の論理そのものであった。そして同時に、ヘーゲルとしては、經驗科学を克服して自らの思弁哲学に従属せしむるための論理でもあったわけである。しかしマルクスにあっては、近世の経済学的方法論的發展の伝統の上に立つて、その經驗科学としての下向的分析の方法をば、そのままの実存形態において継承して、古典経済学までの理論化ないし体系化の方法としての悟性的な上向的思惟を、ヘーゲルの概念的思惟に轉化せしめうるように——すなわち、上述のごとく思弁の意味を内在せしめているものとして——その本質規定を改造することによつて、ヘーゲルとは逆に、思弁哲学を克服して經驗科学に従属せしむる面の確立に成功したのであった。そのかぎりでは、マルクスの概念的思惟の端緒における立場の轉換の論理は、これまた、ヘーゲルのそれとは異なる構造をもつものと、われわれは考えねばならないのである。したがつて右の引用文において、「端緒としての要素的商品にたいする悟性的分析が、思弁的な演繹的綜合に復帰せざるをえない」といつたこの必然性は、下向的過程そのものにおいて最初から、概念的思惟の理性的立場を、目的として即

自的に潜在せしめていたという根源的な事柄に由来するのであり、そして、この下向過程そのものの即自的な理性的立場にたいする向自的な自己関係において、端緒的商品は上向的叙述の歩みを始めうるものと、われわれは考えねばならないのである。これが、経験科学の埒内においての哲学的思惟の端緒の解決の方法であつて、マルクスは、この方法を、『資本論』の第一章において、その第一、二節から第三節への立場の轉換において、成就しているわけである。そして、この轉換の論理を、先きの引用文においては、「下向としての悟性的分析の窮極の原理としての有の仮定性を自覚して直ちに無とすること、すなわち、分析の窮極点を綜合の端緒に反轉せしめて作用化せしめる」ところの方法として、述べてあつたが、この方法は、对象的に実在する歴史的現実の自己運動そのものの論理構造が、われわれの学問的意識にまで自己展開したかぎりのものとして、わたしは主張してゐたのであつた。

(1) この点については、次節の「上向的思の論理構造」において改めて詳述される。

(2) 下向的分析過程に内在するとされているこの思弁の意味については、後節の「上向的叙述の現象学的方法」の解明に關連して、自ら解明されるはずである。